いじめに関する一考察

神谷　かつ江

1　はじめに

いじめの問題が社会問題となって既に久しい。

文部省が平成３年11月に発表した、「生徒指導上の諸問題と文部省の施策について」①によると中学校におけるいじめの発生件数は表１のように学校数、学級数ともに減少してきており、この傾向は小学校、高等学校にもみられている。このことは家庭や学校を含めた地域ぐるみの指導態勢がととのえられ、外的統制の効果があったためと考えられる。喜ばしいことであると思う。

しかし学生相談室を訪れる学生（以下クライエントという）についてみると相当数の者がいじめられた経験を有し、しかもその背景に養育上の問題が介在しているように思われる。このように潜在いじめは依然として後を絶たないし、問題の根は深いようである。そこで本稿では相談事例を通して知られた諸問題を、特にいじめられる者と家庭とのかかわりを中心に考えてみたいと思う。

なお、ケースの紹介にあたっては、クライエントのプライバシーを守るため所属コースの細部は省略してあることをあらかじめお断りしておきたい。

表１　いじめの発生学校数・発生件数

区分	年度	公立学校総数：A	発生学校数：B	発生率 B/A×100	発生件数：C	1校あたり発生件数：C/A
小学校	60	24,796校	12,968校	52.3%	96,457件	3.9件
	61	24,739	6,560	26.5	26,306	1.1
	62	24,692	4,497	18.2	15,727	0.6
	63	24,653	4,135	16.8	12,122	0.5
	元	24,608	3,695	15.0	11,350	0.5
	2	24,586	3,163	12.9	9,035	0.4
中学校	60	10,346	7,113	68.8	52,891	5.1
	61	10,517	4,532	43.1	23,690	2.3
	62	10,555	3,061	29.0	16,796	1.6
	63	10,585	3,969	34.9	15,452	1.5
	元	10,578	3,575	33.8	15,215	1.4
	2	10,588	3,403	32.1	13,121	1.2
高等学校	60	4,273	1,818	42.5	5,718	1.3
	61	4,178	1,130	27.0	2,614	0.6
	62	4,191	948	22.6	2,544	0.9
	63	4,189	883	21.1	2,212	0.5
	元	4,183	969	23.2	2,523	0.6
	2	4,177	888	21.3	2,152	0.5
計	60	39,415	21,899	55.6	155,066	3.9
	61	39,434	12,222	31.0	52,610	1.3
	62	39,438	8,506	21.6	35,067	0.9
	63	39,432	8,714	22.1	29,786	0.8
	元	39,369	8,239	20.9	29,088	0.7
	2	39,351	7,454	18.9	24,308	0.6

昭和60年度は、昭和60年４月１日～10月31日の数である。
文部省報告

2　いじめとは

いじめの定義は多い。そこでここではいじめを「学校の中でほぼ同年齢層の児童・生徒の間で優位にたつ一方が、標的となる他方に対して、心理的または身体的・物理的に、意図的に傷つけたり、害を加えたりする行為」②と定義しておく。

3　いじめの態様

いじめの態様については多くの説明がなされているが、その実態を知るためには文部省のそれが比較的妥当と思われるのでここではそれを引用して紹介する。③

①冷やかし・からかい

標的となる相手に対し、〝ばいきん〟〝くさい〟〝のろま〟〝ぶた〟〝デブ〟など個人の身体的あるいは行動的特徴を大勢の友人の前で誇張していうなど。

②仲間はずし

標的となる相手に対し、知らぬ振りをしたりわざとあいさつをしなかったり、仲間に加えてやらないなど。

③暴力

相手に対し一方的に、殴ったり、蹴ったり、カバンで叩いたりするなど。

④言葉での脅し

〝ひどいめにあわせてやる〟〝ただではおかない〟など相手に恐れをいだかせるような言葉による脅しなど。

⑤持ち物隠し

標的にした相手のカバンや靴、筆箱などを隠すなど。

⑥集団による無視

集団で特定の子を無視し、口をきいてやらないなど。後ほど紹介する事例の中で最も多かったのがこのタイプである。

⑦たかり

物品や金品をまきあげたり、金銭をもってくるよう強制するなど。

⑧お節介や親切の押しつけ

一見おもいやりや親切心から行っているようにみせながら、いじめるなど。

⑨その他

その他少数ながら、性に関するいたずらがある。

4　いじめの背景

いじめの問題は単にいじめられる者といじめる者との間における心理的、物理的な関係だけから考えることはできない。当然のことながらそこには社会的あるいは家庭的な要因がある。たとえば社会的な観点からは、戦後の社会、経済的な変化に伴っての社会や家庭構造の変化などがあげられるし、またそれは、登校拒否、家庭内暴力、校内暴力などとも深くかかわってくる。特に後者について須永和宏は「見えない子どもの世界――いじめ」④の中で次のように述べているのでその要旨を引用して紹介する。

(1)いじめと登校拒否

戦後の子どもたちにみられた異常徴常の第1番目として、登校拒否（当初は学校恐怖症とよばれた）という問題現象があげられる。――中略――が、最近登校拒否の前駆症状を呈する子どもや、友だちあるいは教師と顔をあわせるのが嫌だからなどという単純な理由で登校しない子どもが増えていること。特に昭和50年代半ばから、いじめられたことによる登校拒否が増加しているという。

その意味において登校拒否の子どもを取り扱う場合、少くともその背景にいじめが潜んでいないかどうかを確かめる配慮が必要といえる。

(2)いじめと家庭内暴力

家庭内暴力は昭和40年頃から出現しはじめ、その後増加の一途を辿っている。その凄まじいまでの乱暴狼藉ぶりは一種の精神病者のそれを疑うほどで、いまだ衰退の兆しをみせていない。家庭内暴力はその特徴において、いじめとかなり類似する点が多い。すなわち

①身近な者が攻撃の対象となる。

この点については校内暴力も同様であるが、身近な者（教師・母親）が標的となっている。これらのいずれもが家庭や学校という保護領域内における権威者に対する抵抗ないし反抗である点において共通し、またその背景には身内意識としての甘えが隠されている。

②暴力の態様が陰湿で執拗である。

その態様が言語に絶するほど強烈で、対象に対して暴力や屈辱感を徹底して与えしかもエスカレートしがちである。

③罪意識が希薄である。

加害者的立場にある子どもの多くが、罪の意識が薄くその上、責任転嫁の傾向がみられ、当然ながら他者への思いやりやいたわりが欠如している。

④対人技術におとる。

そうした子どもたちの多くが自分の言動の内面化を極度に嫌い、しかも自己表現が不得意なため、うまく友だち付き合いができない。したがってある意味では、そうした子どもたちによってなされる暴力やいじめの行為は、対象者との関係をとり結ぶための原始的サインであり、メッセージであるという見方もできる。いずれにしてもこのような方法によってしか自己表出ができないのであるから、これら子どもたちの性格及び社会性は未熟であるといわなければならない。

⑤親の過大な期待

親の多くが勉強という単一のモノサシで子どもの人格まで計るなど、単一でしかも期待過剰なため子どもたちに心理的な圧迫を与えている。

⑥顕在化しにくい

事案の多くが保護領域内で行われるので公になることが少ない。

(3)いじめと校内暴力

校内暴力は昭和50年頃から目立ちはじめ、特に昭和54年頃顕著に増加したが、最近は減少傾向にある。

校内暴力は大まかに分けて、教師への暴力、生徒間暴力、そして器物損壊行為の３つに分けられる。

いじめとの関連で共通点を指摘すると次のようである。なお生徒間暴力の多くはその後いじめに吸収されているように解されるのでここでは除外した。

①無責任性

器物損壊行為はその対象が物であるのに対して、いじめは人間であるという点で相違はあるが、多くの場合グループで行われることもあって匿名性を帯び悪質である。

②暴力の背後に不満や敵対感情が隠されている。

以上概観したようにいじめは大規模な社会変動の中での時代的産物であり、また校内暴力や登校拒否など多くの問題行動と密接な関係をもつなど現代の学校のかかえる深刻な問題といえる。

5　現代のいじめの特徴

現代のいじめを象徴するキーワードとしては〝シカト〟があげられる。シカトとは〝無視をする〟〝口をきいてやらない〟[5]ということで殴る、蹴るなどのように暴力をふるうのではなく、仲間はずしをすることによって相手に精神的に圧力を加えることである。いじめられる者つまりシカトの対象となった者は、最初〝バイキン〟とか〝きたない〟とか〝くさい〟などの悪口を不特定の多衆から言われる。ここで被害をうけるに至るプロセス及び被害者の受ける痛手の種を知る一助にするため森田洋司らの研究結果を紹介したい。森田らは1984年学級集団レベルに焦点をおき、東京・大阪の小学生及び中学生44学級1718名とその担任教師を対象に、学級集団におけるいじめの構造を解明した。[6]すなわち現代のいじめは「いじめる者」（加害者）、「いじめられる者」（被害者）という関係だけで起こるわけではない。これらの直接の当事者を含めて、まわりでこれを「はやしたり面白がって見ている者」（観衆）と「見て見ぬふりをする」（傍観者）という四層構造が密接にからまりあった学級集団全体のなかで起こってくるというのである。そこで加害者の１人がいじめを加えようとしても「観衆」や「傍観者」が否定的な反応を示せば、いじめはクラスからなくなるか、あるいはいじめの標的が他に移されていく。逆にまわりが面白がったり黙認していれば、いじめは助長される。この場合、「観衆」はいじめにたいして積極的に是認してくれる体系となり、傍観者は暗黙的支持の体系として作用する。いじめがだれに、どんな手口で、どれだけ長く陰湿に行われるかは、加害者にもよるが、むしろか

なりの数にのぼる「観衆」層と「傍観者」層の仕方によって決ってくるというのである。

このように見てくると現代のいじめは、特定の個人が行う問題行動というより、むしろ集合化したいじめ集団によって行われる傾向が強いといえる。

6　いじめの病理

人間としての人格の形成は社会のなかでさまざまな形で他人とかかわり合いを持つことによって達成されていく。

すなわち幼児期の子どもは、まず両親や兄弟など家族という小集団をとおして社会生活に参加しその後、幼稚園や保育園などの集団に入ることによってはじめていわゆる社会の一員となる。

人間ひとりひとりの社会的存在を決定するものは、家庭や仲間や学校などの小集団への参加であり、その集団への参加によって、各自の社会的役割が与えられ、自我同一性や人格形成の土台を作っていくのである。そのため特に青年期においては、自分が他人にどのような人間として受けとめられているかということに強い関心を抱くようになる。自分の身体、容貌、能力、性格など、身近な仲間との比較がなされ、自分が仲間からどのように評価されているかということを敏感に感じとりながら自己像をつくりあげていく。

女性の多くが服装や身だしなみにあれこれ神経をつかったり、仲間たちとおしゃべりするのも、他人の目に映る自分を意識しているからであり、またそれは自己像を確認したいと願うが故なのである。

上述したように「自分が自分であること」を仲間を通して作りあげていく青年期という重要な時期に、仲間から拒否あるいは無視されひいては自我像の弱体化につながりかねないいじめに遭遇したときの被害者の心情を思うとき、誠に切なるものがある。

その一端を知るため以下に事例を紹介し、若干のコメントを加えたいと思う。

事　例

〈事例１　対人恐怖症　Ａ子〉

初回

大学祭間近の10月下旬、Ａ子は大学祭実行委員のためクラスのまとめ役として一役かっていたが、クラスメートの〝大変ね〟〝がんばってね〟の傍観した態度に釈然としないものを感じ、相談室に来室した。日頃Ａ子は友人にノートを貸してやったり、自分にできることはできるだけ援助しようと友好的態度で接してきたので、友人が何もしてくれないこと及び自分に対して情けなくなってしまったという。

２回目

その２週間後、再度来室。モヤモヤした胸中を吐き出すかのように、以下のことを供述した。

入学当初、席の近かった人との偶然的な出合いにより３人グループの１人として所属していたが、初めから気の合う人ではなかったことと、大学祭での非協力的態度を知り、これ以上つき合っても自分が辛いだけだと思って自分から離れ、今は１人ぽっちでいるという。１人ぽっちは寂しい。仲良くなりたい人もいるがその人は既に別のグループに所属しているので私はその人にもあまり話しかけられないでいる。きっと人は私を変人、奇人と思っていると自己嘲笑的。（この孤立状態はその後半年以上続いた。）

３～６回省略

７回目

相変わらず孤立状態。孤立して困るのは授業においてペアを組まなければならないときだという。その時は不安で胸がキーンと締めつけられるようで激しく心臓が呼動する。

寂しくて誰かと思いきり話したい。でも相手が迷惑がると思うと話しかけることすらできない。変わりもの、異端児と他人には映っていると思う。そのためますます萎縮してしまう。

――対人恐怖、自己の不確実――

８回目

前期の成績は優が３つと不振。Ａ子自身は成績の不振をさほど気にしておらず、相変わらず

対人関係に固執している。

８回目にしてやっと、高校時代のいじめを告白。Ｉ県の私立女子高校１年在学中、クラスメート数人に取り囲まれ〝あんたはクラスの嫌われ者だ〟と批難されこの一言で大変傷つき、以来何をするにも自信がもてなくなり、他人からの批判や比較に敏感となり、悪いのは自分だと自分を責めてきたという。

上記の一言が折りにふれ思い出され、重くのしかかっているという。

―――高校時代の心的外傷により、劣等感が強まり、自信が固まりにくいという背景がある。―――

９回目

グループに戻りたい。１人でいると、とかく人目が気になって仕方ない。でも今度も失敗することを思うと、容易に人と話せない。それを思ってまた１人ぽっち。

―――所属欲求が満たされず絶えず不安定な状態―――

２年生後半になり就職か進学かと迷ったが、結局就職に決定。しかし就職活動においても、自分を絶えず卑下し、必要以上に過少評価することもあってか、不本意な企業に就職した。

―――Ａ子は家族の話題を極力避ける傾向があり、両親健在という以外は生育歴等不明―――

〈事例２　対人関係不良　Ｂ子〉

Ｂ子は中学２年時にいじめにあい、その後表面的な人間関係しか持てないと悩んで来室した。身長が低くしかも小心。そんなことがあってか対人関係に自信なし。入寮。１年前期、寮での人間関係はまずまずであったがクラスでは孤立。１年後期になって自動車学校に入校したり、サークル活動やワープロ検定等に励んでいたためうまくいっていたが、父親が事故のため死亡。母親１人の収入のため家計苦しく、春休みに仲の良い友達とＳ県へアルバイトに出かけた。しかし友人のように仕事ができず、アルバイト先に迷惑をかけると思い１週間で帰宅する。

この頃からクヨクヨしはじめ過食。そのため２年前期の初めには10kg体重増加。特に同僚が大人になったのに対し、自分はいまだ子どもっぽく駄目だと思い込む。またアルバイト先でも失敗多く自己嫌悪に陥り、自棄的になって寮を無断で出寮し帰宅する。死にたいが実行出来ないという。心配している祖父母の勧めで、１人でＭ大学病院に赴き受診。現在も通院し２週１回のCounselingと投薬を受けている。

〈事例３　現実からの逃避Ｃ子〉

Ｃ子は入学間もない４月下旬、クラスメートにいじめられたので退学したいといって、祖母と思われるくらい高齢な母親とともに来室。

父親は小学校４年時に死亡。家庭は母親、Ｃ子、兄の３人家族。

入学当初における人間関係は良好。授業開始まもない４月中旬、友人７人とＭ市へショッピングにいく。夕食を誘われたが、用事があったため断って帰宅。翌朝、登校したとき友人がクスクス笑ったり、あいさつをしても応答がなかったりで自分だけのけ者にされていると直感。３日間我慢して登校を続けたが４日目から欠席。１週間後退学を決意。

Ｃ子、母親とも被害者意識が強く、特に母親はＣ子がいじめられたと他人を非難するなど攻撃的。継続してCounselingを受けるよう勧めたが、母親の怒りが強く１度Counselingを受けたのみで退学していった。なお、母親より授業料を返還するよう要求があった。

〈事例４　登校拒否　Ｄ子〉

Ｄ子は商業高校出身。高校時代はクラスのボス的存在で学級委員を引き受けるなど姉御的存在。５月の連休後風邪で１週間欠席。その後体調は回復し登校するようになったがどうしても教室に入ることが出来ず、校内をウロウロ歩きまわっていた。Ｄ子の訴えはクラスメートの無視であった。遅刻をしても、欠席してもクラスメートは何の反応も示さず、Ｄ子に何ら興味を示さなかった。無視されていることは、自分の存在が否定されているようでＤ子はそれが耐えられなかった。また商業高校出身ということに負い目を感じ、英語が苦手だったことと相まっ

て自信を失っていく。挫折感と疎外感は日々深まり、自分の殻に閉じこもり、しだいに孤立していった。不登校は約4ヶ月続いたが前期試験直前に母親と来室。半年間休学したのち、来年1年生からやり直したいと申し出る。復学を来年度にした理由は、現在のクラスメートと顔を合わせなくてもよいことと、苦手の英語を克服したいことによる。母親はすべて娘の自主性にまかせるとのことで自分の意見は言わず。

その後D子は半年後1年に復学し、失敗を繰り返すことなく元気に登校している。

〈事例5　自殺念慮　E子〉

E子は非常勤講師のF先生に〝友だちがいないので死にたい〟と手紙を書き、心配した担任に連れられ来室。

大柄で化粧っけもなく破れたスリッパをつっかけるなど、だらしない印象。活気に欠ける。

E子は保育園、小学校、中学校を通していじめられっ子だった。中学時代は特にひどいいじめに合い、男子生徒からわけもなくからかわれ、カバンで頭を叩かれたり、頭が人より少々大きいこともあって〝頭でっかち〟〝カブース〟と言われたりもした。

女子高校に入学した当時は友人も2、3人いたが、2年生の時はその友人も離れていってしまった。母親のアドバイスもあって積極的に関わろうとしたがそれが裏目に出て、逆にからかわれたのでしゃべらなくなり、高校3年時もまたひとりぼっちになってしまった。

短大に入学。たまたま高校時代の同級生と同じクラスになったこともあって、いじめられっ子だったということがクラスメートにわかって以来、すべてのことに積極的になれないという。折角2時間余りを費やして登校してきたのに、いつも一人で喫食せねばならないのでつまらない。友人がうらやましいとぐちる。

登校しても面白くないので退学しようと思ったりもするが親や保証人に悪いのでそれもできないといって悩んでいる。

中学時代から死への願望が強く、担任との交換便りに担任から〝死んでどうするの〟と記されたこともあるという。

入学後、出席・欠席を繰り返しているがなんとか2年生に進級。E子の交友願望が強いため、担任がE子と同じような内向的でおとなしい学生を紹介したが、E子は自分が嫌われる人間であると思いこんで臆病になり、自分から関わりを絶ってしまう。そのためずっとひとりぼっちであった。

担任はやさしく面倒みのよい人であった。E子に対しても寛容な態度でよく話しを聞いてやった。そんな担任に母なるイメージを抱いたのか、この担任の前で2度自殺未遂行為をしている。担任の強い勧めもあり、精神科を受診。

神経症と診断され現在も通院加療中である。

7　いじめられタイプの特徴

紹介事例からも知られるように、いじめられる者にはなにがしの共通点がある。といって上記事例の中には果たしていじめの被害があったかどうか判然しないものもあるが、クライエントにとっては、いじめられたという認識を持っていることだけは間違いない。

そこでこれら事例にみられる特徴を事例毎に整理し、次いでその特徴といじめの関係について若干の考察を加えることにする。

事例A子　小柄である。あどけなさを残す一方で、自信に欠けオドオドしている。

事例B子　小柄である。気が弱そう。知的にも低そうである。

事例C子　ハキハキしている。イエス・ノーがはっきりいえるタイプ。勝気である。

事例D子　大柄である。動きが鈍い。何を考えているかわからない印象を与える。

事例E子　大柄である。清潔感がない。身だしなみからもだらしない印象を受ける。

共通点の1

A子～E子のいずれもが、清潔感に欠け、装う、着飾る、化粧する等の自己の外観を整えることに無関心であるということである。

Cooley（1902）は「人はどの種の自己感情

をもつかは他人の自己に対する態度によって規定され、鏡映的自己には装う・着飾るという着装行為が常に付属してくる」[7]という。氏の言をまつまでもなく他人の評価に無頓着であったり、自己の身体像（body image）に否定的であるということは適正な自己概念の形成を阻害するだけに、今後も問題を残すといえよう。

なお清潔感との関係において最近の若者が、体臭・口臭・ふけ[8]を気にするだけにこのような対象者がいじめの標的になりやすいことも考えておく必要があろう。

共通点の2

第2の特徴として彼女たちが〝自分は駄目な人間だ〟〝自分なんか嫌われているに決まっている〟〝自分には自信がない〟などというネガティブな自己像の持ち主だということがあげられる。そのネガティブさの故に他人のささいな言葉に傷ついてショックを受けてしまう。

A子が〝クラスの嫌われ者〟という友人の言葉をそのまま受容し、反発することもなく、自分はその通りの人間であると思ってしまったなどその好例である。

共通点の3

第3の特徴として、彼女たちは人づきあいが不得手であるということがあげられる。いじめられやすい者は無口でおとなしく、友人と冗談をいったり、ふざけたりすることができない。といって人との親和欲求が弱いのではない。むしろ人一倍強いことが多い。しかし溶けこめないのである。このことについて村上（1976年）は対人的距離がうまくコントロールできないことと、主体性の脆弱性を指摘しているがまさにその通りである。このような彼女に対して第3者、つまり仲間たちにはおもしろ味に欠ける、影響力を受けない、目ざわりな存在だとして映るので、ついには排斥されることになる。

以上のそれとは逆にE子のような個性の持ち主も、仲間から異質な存在としてみられることが多い。それはE子自身もいうように自分から同調しようとしないので、結局は無視されるということになってしまうのであろう。

共通点の4

第4の特徴としてC子、D子にみられるようなナルシシズム（自己愛傾向）のみられることが指摘できる。C子、D子とも〝無視されること〟が耐えがたい苦痛だといってそれぞれ退学、登校拒否という現実逃避の経過をたどってしまったが、果たしてそれが〝無視〟といえるものであったかどうかは検討の余地を残している。というのはC子にいたってはたった1回きりの面接であったし、また進んで仲間に溶けこもうとしていなかったかもしれないからである。いずれにしても思い込みが強く、自分の世界に閉じこもりやすい。また傷つきやすく、被害感情を持ちやすいということはたしかである。

それだけに対応はもとより、心情を正しく知ることの難しいケースといえる。

8　考　察

いじめ行為の原因が奈辺にあるかを明らかにするためには、学校教育のあり方、仲間関係、めまぐるしくかわる社会情勢などを総合し、分析することによって可能であるが、ここではいじめと家族関係、特に母親との関係について考えてみることにする。

R.Jハヴィガースト[9]は人間の発達は乳児期～老人期という段階をふみ、かつその発達段階毎の課題を達成してはじめて次の更なる成長発達をとげるものであり、そうした能力を身につけるには家族のあり方が重要であるといっている。その課題を要約すると小学生の発達課題は社会的役割を学ぶこと、良心、道徳性、価値判断を身につけること、また社会生活に必要な概念を学ぶことなどであり、また中・高校生ではより実践的で親や大人から情緒的に独立することや社会的責任を果たすことなどだといっているが、そのいずれもが親の態度や行動、生活を通して学び取ることによって可能となるのである。その実際を事例を通して考えてみたい。

〈自尊感情と養育態度　A子、B子〉

自尊感情とは「健康な自己愛」（フェダーン）でありそれは「社会的な是認と受容」（エリクソン）のものと形成されると解される。⑩すなわち人生初期における母子関係のなかでの愛情交流にはじまり、次いで学校や集団社会における親以外の他人との交わり経験の中で自己の状況を評価したり、その結果を予測するという認知能力と密接に結びついて発達していくものと思われる。

しかるにいじめられた者らはポジティブな自己像を持てないものが多い。すなわち〝自分は駄目な人間だ〟〝みんな私が悪いから〟と他人と自分を比較し、自分に非があるとして自分を責める。また他人からの批判や比較に敏感で、他人からの好ましくない言動や批判はすべて自分のことだと勘ぐったりする。つまりネガティブな自己像が常につきまとっている。

〝あんたはクラスの嫌われ者〟だといわれたA子が反発もしないでその通りだと受容してしまったのもその故といえよう。

石川嘉津子は両親から情緒的に支持され自律性を尊重されていると認知している人ほど自尊感情が高く、自尊感情の高い親は、子どもも自尊感情が高いと報告している。⑪

また繁多進は、ネガティブな自己像をもつ子どもは、親もネガティブな自己像の持ち主であることが多いと報告している。⑫このことは自信の獲得や心理的安定感さらには保証を親から受けていないということであり、親は子どもの支えとなっていないということである。したがってこのような親のもとでは子どもの自尊感情の形成は困難であると思われる。

ここにおいてわれわれは子どもひとりひとりの個性を尊重し、家族全員か相互に相手を尊重しあうという信頼に満ちた家族関係を構築しなければならないことになる。それだけに親自身の不安感が子どもに影響を与えていないか、十分考えてみることが必要といえよう。

〈母親の攻撃性の影響　C子〉

C子は友人に無視されたとの理由で退学している。彼女の家庭は父が死亡しているため母親が一家を牛耳っている。また母子の関係は密着型で、養育のし方も過保護的。そんなことから母親はC子がいじめられていると思いこんで他罰的になり、学校に対しても不満を募らせていた。この背景について考えてみたい。

ともするとこのような家庭の場合、母親が過度に神経質になったり、攻撃的になったりしやすい。これは母親自身の欲求不満にその原因があるように思う。

すなわち母１人、子１人の単親家庭などでは母親が子育てから家庭問題全般を１人でしなければならないし、相談する相手にも欠ける場合など、母親は孤独な状態におかれることが多い。特に娘との共生意識から子どもがいじめられることは、自分がいじめられているように思われるので過剰に反応してしまうということになる。

臨床事例を検討する中で思うことのひとつに、夫婦仲がよく親から愛されて育った子どもには問題行動が少ないというのがある。夫婦仲がよいということは、種々のトラブルを自分たちの力で乗り越えたということであり、そうした大人たちのあり方から、人に寛容であること、相手を思いやること、困難なこともすすんで切り拓くことなどを学んでいくからであろう。

家庭は緊張解消の場所であるといわれる。ただいまと言って玄関に入るとホットするところである。このように心に安らぎを与えてくれる家庭が本人にとって苦痛と不快しか感じさせないところであれば、心身にたまったストレスを外に吐き出すことになる。その場合、自己本位に考えて不満やイライラをつのらせたり、他罰的になったりするが、一方内向する場合は〝ジメジメしている〟〝臆病である〟〝暗い〟〝陰気くさい〟〝被害者意識が強い〟などの非難を受けるようになる。

だからいじめの直接原因が消失しても、C子の行動は容易に改善されないのではと思われるだけに気がかりである。

〈自我の未熟　E子を中心に〉

人は母親との情緒的つながりを持つことで自

己と他者との区別をしたり、しつけられることによって自我を形成していくものである。

E子の場合は自殺念慮が強く、恩師宛に友だちがいないので寂しいとの理由から自殺をほのめかす手紙を郵送している。精神医学者の稲村博はその著書[13]、「わが子と教え子たちを自殺から守る十章」で子どもの自殺を5つに分別している。その第1の要因として家庭の問題をあげている。要旨を引用すると「家庭に問題がある。家庭問題というと今日ではほとんど親子の問題になる。低学齢の子どもほど家庭とのかかわりが深いので、家庭の問題が自殺の動機になることが多い。他の動機に分類されても家庭のことがしばしば深く関係している」と家庭問題にその原因があると述べている。

そのことをE子について考えてみる。彼女は高齢な両親の1人娘として生まれ養育された。E子の父親は、定年をあと数年に控えた実直な職人タイプの父であった。E子はこの父親が好きであった。小づかいを要求したり、甘えることが許されるのも父であった。反対に母親は、財布の中身が足らないとE子をどろぼう呼ばりして、財布を身につけて就寝したり、そうかと思うと成人式には1年早いのに高価な着物を買い与えたりするような人であるため、E子は母親の両面性について悩んでいた。

そんなことからE子は両親が実親ではないのではないかと疑っていたようである。この根強い不信感と母親の一貫性のない養育のため、心の安らぎを与えてくれる家庭がE子にとっては窮屈な居心地の悪い場所になり、孤独感や疎外感を深めていった。

加えてE子は特異な個性の持ち主であったため、保育園時代からいじめられ、中学時代では男子生徒から叩かれたり、ぶたれたりしているばかりか女友だちもいないので、自分の気持ちを打ち明けることができなかった。

先にも述べたように家庭というものは本来緊張解放や安らぎの場所であるし、その一方で人はここで基本的生活習慣やしつけ、言葉、思考、善悪の判断など多くのことを親を通して習得し、自我を獲得していくのである。

E子はそれが十分でなかった。そのためか、ノックする習慣がないこと、肘をついて食事をすること、清潔感に欠けることなど、基本的マナーや最低限必要とされる身だしなみについてもだらしない点が目立った。子どもの欠点を指摘できるのは親をおいて他にいない。

このように自我の未熟なE子であるだけに、今後の人生においても波紋を投げかけそうで気がかりである。

9　まとめ

今まで学生相談室を訪れたクライエントの事例を検討しながら、いじめられやすい者に焦点をあて、親とのかかわりを中心に考えてきた。とはいえ、いじめ行為がすべて家庭関係にあるというわけではない。学校教育のあり方、めまぐるしく変わる社会情勢、過剰な情報文化などいじめを生む要因はいくつもある。これらのことについては今後更に多くのケースを綜合的に分析する必要があると思うが、いじめられやすい者の性格や態度に問題があり、しかもそれがしつけや基本的生活習慣の形成などに関係する両親と子どもとのかかわり上の問題であることを痛感したことだけは事実である。

書き終えて読み直してみると、突っこみの不足など多くの欠点が目に付く。そのあたりは更にケースの累積を重ねることによって補っていきたいと考えている。が、それにもまして未完のまま卒業していった彼女たちが、弱肉強食ともいえる競争社会の今をどう生きているかが大変気がかりである。

おわりに

本論文の提出にあたり、ご指導いただきました本学教授小林良夫先生、岩舘憲幸先生に心から感謝の意を表します。

引用文献

①③文部省初等中等教育局中学校課
「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」　1991年12月
②古畑和孝　「いじめ」はなぜ起こるか――その背景と構造――『中等教育』　1985年　小学館
④須永和宏他　「見えない子どもの世界――いじめ」　1987年　慶應通信
⑤中日新聞　1985年11月10日朝刊
⑥森田洋司　学級集団における〝いじめ〟の構造「ジュリスト」No.836　有斐閣　1985年
⑦ Cooley,C・H.　「社会組織論」大橋幸・菊池美代志訳　1970年　青木書店
⑧朝日新聞　1992年２月17日朝刊
⑨藤永保・三宅和夫他　「教育心理学Ⅰ」　1989年　有斐閣
⑩遠藤辰雄　「アイデンティティの心理学」　1981年　ナカニシヤ出版
⑪石川嘉津子　「Self-esteem と両親像」　1980年　京都大学教育学部
⑫繁多進　「わが子をいじめっ子・いじめられっ子にしない家庭教育」『児童心理』　1985年12月号臨時増刊　金子書房
⑬稲村博　「わが子と教え子を自殺から守る十章」　1980年　大修館書店